

1

笠間藩医結解庸徳による 全身麻酔下の上顎腫瘍摘出術

松木 明知¹⁾, 佐藤 裕²⁾

¹⁾弘前大学医学部麻酔科, ²⁾五所川原市立西北中央病院麻酔科

華岡流の医術の真髄とも言うべき麻沸散による全身麻酔下手術例は、水戸の本間玄調、伊予の鎌田玄台を除いては殆ど知られていなかった。このため小川鼎三、藤野恒三郎など従来の研究者は青洲が秘密主義を採ったためにその医術が普及しなかったと主張し、この意見が大勢を占めている。演者の一人松木は、秘密主義のために青洲の医術が普及しなかったのではなく、青洲の門人による手術例が知られていないと考え、これまで弘前の三上道隆、福井の橋本左内、江戸の宮河順達、杉田立卿、熊本の進藤寛策の事例を発掘して来た。今回常陸の笠間藩医結解庸徳による全身麻酔下の手術例を発掘したので報告する。

山形県酒田市沖の離島飛島の鈴木家は代々庄屋を務めてきたが、二代目の「多七」(1814~1912)は地域医療の必要性もあって酒田の板垣氏について医を学んだという。その際書写したと思われる写本が20数冊遺されている。その中に「治験法談」と題する1冊がある。和綴、29丁の写本で書写者は「都飛志摩 鈴木七」であるが、原著者、書写年月は不明である。内容は諸書から臨床事例を抄出したものであるが、第23丁表から24丁表にかけて青洲の門人笠間藩の結解氏による全身麻酔下の手術例が記述されている。この例は従来の報告に見られなかったもので、常陸における華岡流の医術の普及を実証し、演者らの年来の主張を補強強化すると思われるので報告する。以下に原文を示す。旧漢字、異体字を常用漢字にして示す。句読点は演者松木による。

常州真壁郡大木村直吉ナル者、年四十三。尋常鼻痔ノ如キ者四年前ヨリ出ツ。漸々蔓延シテ其貌凶ノ如ク、今年春ヨリ鼻中息肉靦骨上ニ至リ、右ノ眼出ツ。恰モ蝦蟇眼ノ如シ。瞳子明ヲ失ス。口中贅肉下垂シテ岩窟ノ如シ。歯牙丘倒シテ上下齟齬ス。累月愈大也。治ヲ求ムル事数医ニシテ更ニ無効。闔室相患テ良医ヲ四方ニ募ル。尔後東都ニ至リ、百方治ヲ求レ共、終ニ治スル事ヲ得スシテ帰ル。親族一医中茎玄悦ト云シ者アリ。曰、吾聞笠間ノ侍医結解氏ナル者アリ。斯人必能ク之ヲ治セント。乃振起シテ余カ先生ヲ尋子来ル。時ニ閏三月中旬也。患者曰、僕ヤ四方ニ奔走、医ヲ求メ療スト雖共無治之者。今諸決死生。君ニ先生診視シテ告テ曰。是毒深シ。鼻中ノ息肉咽喉ニ及フ。且腐爛セリ。薬石及フ処ニ非ス。但其頑肉ヲ切断スルノ手術アリト雖共、療スルモ亦危シ。患者答曰。欲救之ヲ、而不理則命也、天也。毫モ無遺恨也ト。乃十有八日ニ至リ、辰之時、麻沸湯ヲ服サシメ、巳ノ刻ニ至リ、瞑眩神気昏々、瞳子散大ス。呼之不应。之爪不知。乃利刀ヲ以テ、鼻梁ヨリ靦骨ニ向ヘ斜ニ剪ル事二寸余。鼻梁之絡ヨリ飛血ス。先生秘術ヲ施シ止ム。大関生縦横ニ搔破リ、魚ノ腐肉ノ如キ者且凝血マテ三刀ヲ用ヒ取り尽シ、更ニ焼酎ヲ以テ洗淨シ、縫合スル事五針。撥(原文は手偏に祭)スルニ神羔ヲ以テス。鼻中ニ紙撚ヲ指シ入ル事三寸許リ。余ハ金創ノ術ニ随フ。尔後、家方瀉心剂且一奇方ヲ投ス。薄暮ニ至リ、麻沸湯ノ薬気尽キテ始テ人事を知ル。乃手術中ノ事ヲ問ヘハ、総テ知ラサル也ト。我同門高塩生、此事実ヲ郷ノ父老ニ示サン事ヲ請フ。我亦親シク耳目スル処ヲ書シテ、以テ与之。(凶は省略す)

この手術が行われた年代や術者結解庸徳、患者直吉について笠間市、下妻市において実地に調査した結果を加えて考察したい。